

Title	A Study on Visualization Techniques of an AR- based Context-Aware Assembly Support System in Object Assembly			
Author(s)	Bui, Minh Khuong			
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文			
Version Type	VoR			
URL	https://doi.org/10.18910/69716			
rights				
Note				

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

論文内容の要旨



論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (Bui Minh Khuong)					
論文審査担当者		(職)	氏名		
	主查	教授	竹村 治雄		
	副 査	教授	尾上 孝雄		
	副 査	教授	清川 清(奈良先端科学技術大学院大学)		
	副 査	准教授	間下 以大		
	副 査	准教授	伊藤 雄一		

論文審査の結果の要旨

本論文はヘッドマウントディスプレイ (HMD: Head Mounted Display) を用いた拡張現実 (AR: Augmented Reality) による組立支援システムにおける可視化手法に関する一連の研究を取りまとめたものである. ARによる組立支援シス テムはAR技術が登場した1990年代から存在するが,現在にいたるまでその多くは組立状況を自動的には認識せず,個 々の作業手順完了の確認をユーザの目視に頼っている.本論文では,組立状況を自動認識する組立支援システムを構築し,それに適した作業手順の可視化手法をいくつか考案して有効性を評価したものであり,これまでに例がない研究である.本論文の主な成果として次の三点が認められる.

第一に、実際のブロック玩具による組立状況を自動的に認識するテストベッドシステムを構築し、ARによる2種類の 可視化手法(作業対象と次に組み立てるべきブロックの三次元モデルを作業対象に重畳表示する「オーバーレイ」と それらを作業対象の横に複製表示する「サイドバイサイド」)を考案して紙ベースの組立支援と比較している.テス トベッドシステムはRGB-Dカメラとマーカベーストラッキングを用い、卓上でのブロック玩具の組立状況を実時間で認 識することができる.また、比較実験では紙ベースの組立支援に比べてARによる組立支援では作業誤りをより低減で きることを確認している.ARシステムではオーバーレイ手法に類した可視化が一般的であるが、サイドバイサイド手 法のほうが作業時間をより短縮するという興味深い知見を得ている.

第二に、オーバーレイ手法を改善する手法をいくつか考案し、改善手法とサイドバイサイド手法を改めて比較評価 している.具体的には、オーバーレイ手法では作業対象の視認性が低下する欠点を改善し、重畳表示する内容を限定 した「部分ワイヤフレーム」と「ファントム」と呼ぶ2つの手法を考案し、部分ワイヤフレーム手法の優位性を確認し た上で、これとサイドバイサイド手法を再度比較している.結果として、サイドバイサイド手法の優位性が改めて確 認されている.高精度なトラッキングや位置合わせを要するオーバーレイ手法やその改善手法に比べて、より簡易な 手法ともいえるサイドバイサイド手法の優位性が示されたことは非常に興味深い.

第三に、HMDの視野角が狭い場合に適した可視化手法について検討している.視野角が狭い場合、世界座標に固定さ れた三次元モデルは首振りに伴って頻繁に視界から外れてしまう.一方、スクリーン座標に固定した場合は作業対象 との位置姿勢の関連が不明となる.そこで、三次元モデルの位置についてはスクリーン座標に固定した上で、その姿 勢については作業対象の姿勢に一致させるハイブリッドな可視化手法とその亜種を考案し、サイドバイサイド手法と 比較評価している.その結果、ハイブリッド手法は作業時間の点ではサイドバイサイド手法と同等であり、主観評価 の点ではサイドバイサイド手法よりも好まれるという結果を得ている.

これらの成果は、それぞれ専門学術論文誌やトップカンファレンスに採録されている.

以上のように、本論文は今後さらに利活用が進むと期待される拡張現実技術の進展に重要な成果を挙げた研究として、 情報科学に寄与するところが大きい.よって、本論文は博士(情報科学)の学位論文として価値のあるものと認める.